

Market Flash

**トランプ大統領は再選なるか・・・！？
～ 分断の原因か結果か？ ～**

2020.10



日本アルプス電子 株式会社
NIHON ALPS ELECTRONICS CO.,LTD.



Market Flash

分断されるアメリカ



アメリカにとって4年に一度の大統領選挙の時期が来た。

過去第2次世界大戦後に大統領選挙に臨んだ現職大統領10人のうち、敗れたのは3人だけ、「再選率」は70%に上る。普通であれば道半ばの大統領としての役割をそのまま継続するということになるのであろうが、今回はあのトランプ大統領をあと4年間もやらせるのか!?という風潮の中で注目されている。

過去の大統領選で敗れた3人とは、1976年のフォード(共和党)、1980年のカーター(民主党)、そして1992年のブッシュ(父・共和党)だ(※注:フォードは1974年、ニクソンの辞任に伴って副大統領から昇格したため、1期目は選挙戦を経っていない)。果たしてトランプ大統領は4人目となるのか・・・?

4年前の2016年10月のレポートで大統領選挙のことを書いた。

「過去にこれほど注目されたアメリカ大統領選挙があったらどうか？」

その原因は全て共和党候補のトランプ氏にある。

暴言を吐き、実現不可能に思える政策を掲げ、共和党内からも投票拒否にあっているトランプ氏がこれほどの支持を集めていることに、そこに潜む米国の問題の深さが世界中から注目されている。時を同じくして、英国国民がEUからの脱退を選んだ理由も同じ背景があるとみられている。フィリピンではさらに激しい暴言を吐く大統領が誕生している。こうした動きに中国やロシアがいろいろな意味で自国勢力を拡大しようとしている。

もし、トランプ氏が米国大統領になったとしたら・・・まさか・・・とは言えない状況である。クリントン氏がリードしているとは言っても、英国のように最後に決めるのは国民である。大票田と言われている州は、低所得者層の白人でブルカラーの労働者が多い州である。今まで選挙に行かなかったこれらの低所得者ブルーワーカーがトランプ支持に行動を起こしたら、結果はわからない。」

そして、11月のレポートでは

「アメリカ大統領選挙はトランプ氏の圧勝(と言っていいであろう)となった。英国のEU離脱に次ぐ、いやそれ以上の衝撃で世界に伝えられた。それほど予想外の結果だったのだろうか？アメリカが求めたChangeとは何だったのだろうか？」

イギリスもアメリカも本を正せばイギリス人文化、急増する移民にストップをかけるという意味でも選んだ結果は同じであった。ある新聞では、「米英のアングロサクソンの両国が導くグローバル化やエリート(支配層)に庶民が不満を募らせた結果だ」としていたが、果たしてそうだろうか？

この結果は、格差問題ではなく(もちろんこのような面もあるが)、アングロサクソンのアイデンティティ、今回でいえばアメリカのアイデンティティを取り戻したいという意思の表れであったと思う。」

それから4年

- ✓ 環太平洋パートナーシップ(TPP)からの離脱
- ✓ 北米自由貿易協定(NAFTA)の見直し
- ✓ 「核なき世界」に向けたイラン核合意の破棄
- ✓ パリ協定離脱手続き開始
- ✓ ユネスコ、国連人権理事会からの脱退
- ✓ WHOからの脱退

この4年間トランプ大統領は、オバマ前大統領が採ってきた外交をほぼすべて否定し、「米国第一主義」の道を突き進んできた。



Market Flash

分断されるアメリカ



アメリカ第一主義を求め国際社会からの分離をし続けてきたが、では、国内ではトランプ大統領の下国民がまとまったのであろうか？否である

アメリカ国内においても白人至上主義者がトランプ大統領を支援し、黒人やヒスパニックとの間の溝がますます深まった。貧富の差も拡大している。

5月25日、ミネソタ州ミネアポリスで、黒人男性ジョージ・フロイドさん(46)が、わずか20ドルのために白人警官のデレク・ショービンに暴行されて死亡した。ショービン他3名の警察官は、フロイドさんがコンビニエンスストアで偽造20ドル紙幣を使ってタバコを買おうとしたとの通報を受け、現場に駆け付けていた。ショービンは8分46秒の間フロイドさんの首を膝で地面に押し付けて制圧。フロイドさんが「息ができない」と訴え、意識を失い、救急車が到着してからも、1分にわたって圧迫を続けた。

この事件に憤りを感じた多くの人々が人種を超えて結束し、全米各地、さらには世界各地で「**ブラック・ライブズ・マター(黒人の命も大切だ)**」というメッセージを掲げて抗議デモを行った。参加者は、過去に人々の命を守る立場であるはずの警察官に殺された大勢の黒人に対して哀悼の意を表するとともに、広範囲にわたる警察改革と人種による不平等を是正するための法整備などを要求。このおおむね平和的な抗議活動をきっかけに、米国の人種差別問題は改めて世界の注目を集めることになった。テニスの大坂選手のマスクでの抗議も記憶に新しい。

このようなアメリカの分断は今に始まったことではない。

トランプ大統領は分断の『原因』ではなく『結果』だといわれる。この「アメリカの分断」については、4年前のレポートでもやはり取り上げた。その一部を再度ここでご紹介する。

「アメリカの分断」という本が2004年に日本語訳され出版された。著者はサミュエル・ハンチントン氏だ。あの「**文明の衝突**」の著者で知られている作家である。(私は今でもこの2冊については最も優れた著書の1つと思っている)

この著書で、アメリカという国の独特のアイデンティティが、どのようなもので、いかにして生まれ、そして、歴史とともに変わりゆく様子を克明に分析して説明している。

「分断されるアメリカ」

著者は「はじめに」で次のようなことを述べている。

アメリカ人は自分たちのアイデンティティの実体を、**人種、民族性、イデオロギー、文化**によって定義してきた。また、「アメリカの信条」(トーマス・ジェファソンによってまとめられたもの)は、**アメリカのアイデンティティを定義づける重要な要素と一般に見なされている**。だがこの信条は、17世紀と18世紀にアメリカに入植してこの国を築いた人たちの、**アングロ・プロテスタント独自の文化の産物**だった。その文化の主たる要素には、**英語、キリスト教、信心深さ、法の支配**に関するイングランドの概念、支配者の責任、個人の権利、などなどである。

このアングロ・プロテスタントの文化は3世紀にわたってアメリカのアイデンティティの中心をなしてきた。それこそアメリカ人に共通するものであり、多くの外国人が述べてきたように、他の国民とアメリカ人を区別してきたものでもあった。



Market Flash

分断されるアメリカ

「アメリカの信条」とは？

アメリカの信条という言葉は、1944年にグンナー・ミュルダールが著書「アメリカのジレンマ」の中で有名なものにした。アメリカの人種、宗教、民族、地方、経済における異種混合性を指摘した彼は、**アメリカ人にはそれでも「共通のもの」があるとし、それは「社会の気風であり、政治的な信条」だと主張した。それを「アメリカの信条」と名付けた。**多くの学者が信条を定義したが、共通していることは、「**個々の人間の本質的な尊厳と、すべての人の基本的な平等と自由と正義及び平等な機会に対する譲ることのできない権利**」である。ジェファソンは人の平等と譲ることのできない権利、さらに「**生命と自由および幸福の追求**」を独立宣言に盛り込んだ。

American Dreamはこの平等の機会によって誰もがつかむことのできる夢である。この根底にあるのがアメリカの信条だったのである。

ところが、**20世紀末になると、この文化の顕著性は、中南米やアジアから新しい移民の波が押し寄せたことによって挑戦を受けた。**

①知識人や政治家の間で多文化主義と多様性を重視する政策が人気を博したこと

⇒これまでは人種と民族性がアイデンティティの要素であったが、アメリカは多民族、多人種社会であるとする政策に転換していったのである

②アメリカの第二言語としてスペイン語が普及してアメリカ社会の一部がヒスパニック(スペイン語を母国語とする集団)化したこと、

⇒このヒスパニック化によって**アメリカ社会が二分化し、従来のアメリカのアイデンティティの定義が大きく変わったこと**がアメリカ社会全体の不安定さにつながっていると著者は指摘している

③人種、民族性、ジェンダー(性別)をもとにした集団的なアイデンティティが主張されたこと

⇒かつてのような「アメリカの信条」に基づく一本化されたアメリカのアイデンティティではなくなったということである。

④エリート集団がますます世界主義的でトランスナショナルなアイデンティティを持つようになったこと

⇒これがまさに**グローバル化**である。グローバルに展開する企業の経営者は世界主義的な考え方をもち、決してアメリカ一国だけのためにビジネスを展開するということではなくなったということである。税金逃れのタックスヘブン企業が又にも典型例であろう。



Market Flash

分断されるアメリカ

1960年代以降の数十年の間に、アメリカの中心となるアングロ・プロテスタントの文化と、自由と民主主義を謳う政治的な信条は4つの難題に直面した。

1. ソ連崩壊によってアメリカの安全保障に対する重要かつ明らかな脅威がなくなり、そのためにナショナル・アイデンティティの顕著性が減少した(世界に貢献するアメリカの役割が薄らいでいった)
2. 多文化主義と多様性のイデオロギーによって、アメリカのアイデンティティの中心であるアメリカの信条の正当性が蝕まれていった。
3. 1960年代にアメリカに第三の移民の大波が始まり、それによって以前の波のようにヨーロッパからではなく、主に中南米とアジアから人々がアメリカにやってきた。これらの移民の場合、母国との絆を保ちつづけ、母国の文化を保ち続けた。
4. アメリカの歴史上、移民の過半数近くが英語以外の同一言語を話していたことはこれまでになかった。スペイン語を話す移民が優勢であることの影響は、継続的に強まっていった。

また、ハンチントン氏はこの著書を書いた2004年(執筆時点は2002年ごろ)に、今後のアメリカのアイデンティティの在り方について4つの方向性を示している。

1. 信条に基づくアメリカ

アメリカはその核となる文化を失い、多文化的になる。それでも、アメリカ人は「信条」の原則を守り続け、それが国としての統一性とアイデンティティのイデオロギー的あるいは政治的な基礎を与えてくれる可能性もある。

2. 二分化されたアメリカ

1965年以降における大量のヒスパニック系移民によって、アメリカは言語面(英語とスペイン語)及び文化面(アングロ対ヒスパニック)でますます二分化されるかもしれない。

3. 排他主義のアメリカ

様々な勢力がアメリカの中心的な文化と信条を脅かすようになると、アメリカ生まれの白人が、これまで疑問視され放棄されていたアメリカのアイデンティティの人種的、文化的に異なる人々を締め出して追い払う、あるいは抑圧するアメリカを作り出すかもしれない

⇒これがまさにトランプ現象の表れではないだろうか

4. 活気を取り戻すアメリカ

あらゆる人種と民族のアメリカ人が、自分たちの中心的な文化をよみがえらせるかもしれない。それはとりもなおさず、きわめて信仰心が高く、いくつかの宗教的マイノリティを含みながらの、主にキリスト教徒からなる国家としてのアメリカを取り戻すことを意味する。

5. コレラや他の可能性をいくつか組み合わせたもの



Market Flash

分断されるアメリカ



アメリカ人が自分たちのアイデンティティをいかに定義するかが、ひるがえって世界の国々との関係の中でアメリカをどの程度、世界主義的な国として、あるいは帝国主義やナショナリズムの国としてみなすかという問題にも影響を及ぼすのである。

どんな社会も、その存在(愛国心)を脅かす脅威にたびたび直面するものであり、やがてはそれに屈服することになる。それでも、深刻な脅威にさらされながら、衰退のプロセスを止め、あるいは逆行させて崩壊を遅らせる社会もある。アメリカにはそれが可能だと、私(ハンチントン氏)は考える。過去三世紀半にわたってあらゆる人種、民族、宗教のアメリカ人によって受け入れられてきたアングロ・プロテスタントの文化と伝統及び価値観に、アメリカ人はもう一度立ち返るべきなのだ。これらのものこそ、自由、統一、力、繁栄の根源だったのであり、そして世界における持続した勢力として道徳的なリーダーシップを発揮してきたもとだったのである。

ここで明言しておくが、これはアングロ・プロテスタントの文化の重要性についての主張であり、アングロ・プロテスタントの人々の重要性を述べるものではない。アメリカが成し遂げた功績の一つ、おそらくは最大の功績そのものは、歴史的にこの国のアイデンティティの中心をなしていた人種と民族性という要素をここまで排除してきたことであり、各人はその長所によって評価されるべきとする多民族、多人種の社会になったことだと、私は考える。

思うに、それが成し遂げられたのは、何世代にもわたるアメリカ人がアングロ・プロテスタントの文化とこの国を築いた入植者たちの「信条」を奉じてきたからなのである。こうした信念を持ち続けられれば、建国者たちのWASP(アングロ・サクソン系白人新教徒)の子孫が影響力を持たない少数派になったのちも、アメリカは末永くアメリカであり続けるだろう。

それが、私の知る、私の愛するアメリカなのだ。

著者が望んだアメリカは、たとえ先述の(2)二分化されたアメリカになったとしても、(1)アメリカの信条を信じ、多民族、多人種で(4)活気のあるアメリカであり、それを築くことができると信じているのである。

しかし、残念ながらトランプ大統領が支配したこの4年間はハンチントン氏の考える愛するアメリカにはなっていない。

この著書には、アメリカの歴史を通じて、ナショナリズムの台頭、勝利、衰退などを詳しく述べている。

歴史的には紆余曲折はあっても、それでもアメリカはいくつもの障壁を乗り越えて世界のリーダとして歩んできたのである。しかし、アイデンティティの4つの要素(人種、民族性、文化、宗教)も人口構成が変わり、黒人ヒスパニック系が半分を占めるようになってきている現代においては、少数派になろうとしているアングロサクソン系のアイデンティティが反発を始めているのである。そして、かつてはそのアングロサクソン系のアイデンティティにあこがれ夢見てきた移民もそれに同化することなく自らのアイデンティティを維持してきてしまった結果の分断ではないだろうか。

そして、その分断の結果としてトランプ大統領が誕生したのである。



Market Flash

分断されるアメリカ



<分断に拍車をかけるメディア>

さて、今回の大統領選に目を向けるとその分断はより激しくなっているように見える。第1回目のテレビ討論のお互いの罵り合いをみていると、「これがあのアメリカを代表する政治家なのか・・・」と他国ながら嘆かわしくなってきた。

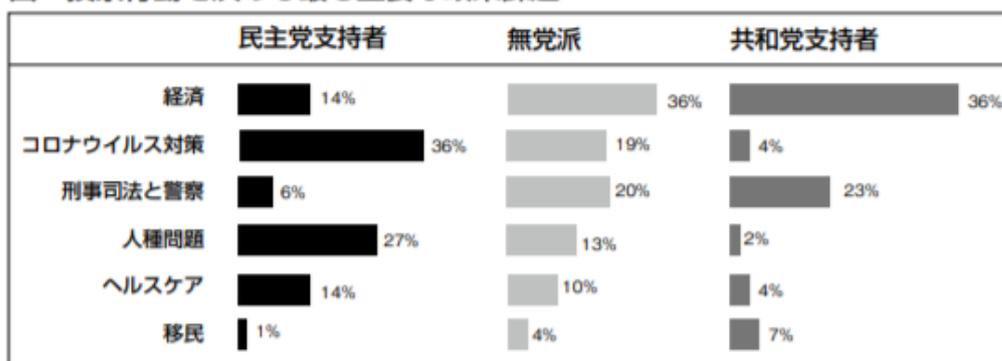
しかし、何度も書いたようにトランプ大統領が今のようなアメリカの分断を生んだ「原因」とはいえない。もちろん、分断をより激しいものにしたと思う人は多いと思う。

オバマ前大統領は「一つのアメリカ」を掲げて国内の分断を乗り越えようとしたが、歩み寄りの姿勢がかえってリベラル派と保守派双方の不満を高め、対立はより激しくなったのも事実である。

現在の大統領選を見ているとどちらか極端な言動が激しくなっているような気がする。その要因となっているのがメディアやSNSである。SNSでは、左右どちらであれ振り切った言説が注目を浴び、中道・中庸な意見は全く相手にされない。

メディアについては、民主党支持者はNBCかCNNを、共和党支持者はFOXニュースを見ている。共和党支持者の関心は、経済が53%、二位は犯罪・警察問題で23%、三位は移民で7%、一方、民主党支持者の関心はコロナ問題が36%でトップ、次いで人種問題が27%、三位に経済と健康保険が14%で並んでいる。

図 投票行動を決める最も重要な政策課題



(出典) KFF Health 追跡調査 (2020年8月28~9月3日)

真っ向から食い違う両党の支持者であるが、その意見の違いをSNSがさらに激しいものにしていく。トランプ大統領のツイッターは有名であるが、SNSはどちら側の言説であれ振り切った発言になり、それを両支持者層の中で回しているだけで、両支持者層の人達はそれぞれに都合のいいSNSやメディア(テレビ、ラジオ)しか興味がないのである。

このように、現在のアメリカでは各メディア、SNSがアメリカの分断により拍車をかけている。

これは、ハンチントン氏が「アメリカの分断」を書いた時期にはなかった現象である。分断を呼ぶスピードと深さまでは予測できなかったのである。もし今生きていたら、今のアメリカの状況をさぞかし憂うことだろう。



Market Flash

分断されるアメリカ

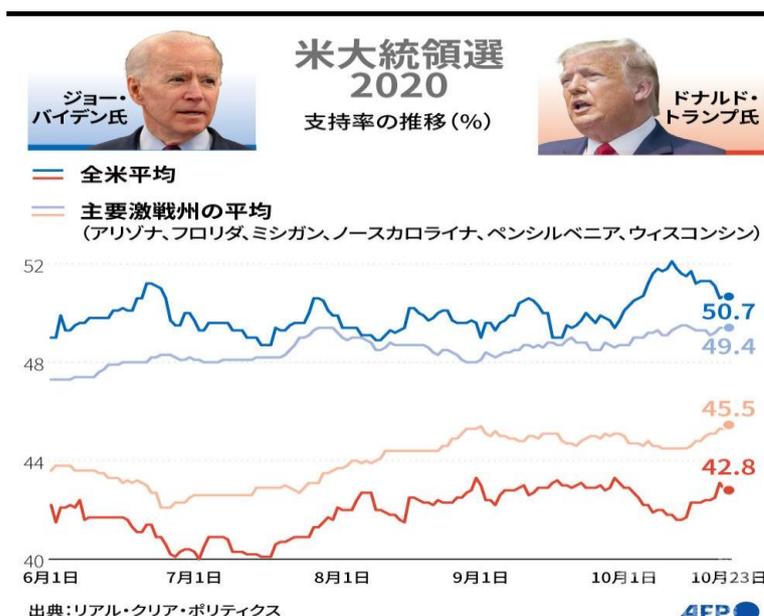


アメリカ大統領選挙は今のところバイデン氏が優位とされている。4年前もクリントン女史が圧倒的に優位とされていて、ふたを開ければトランプ大統領の大逆転であった。今回も最後のどんでん返しがあるのだろうか？例えなくても懸念されているのが、トランプ大統領は敗北宣言をしないということだ。大統領選挙の通例では、負けた候補が敗北宣言をすることになっている。それを今回はもしトランプ大統領が負けてもしないと言っている。負けた場合には、郵便投票に不正があったと最高裁に訴える構えだ。これで問題になるのが、最高裁判事の構成だ。政党問わず国民に人気のあったギンズバーグ女史が亡くなり、その後にトランプ大統領は保守派のエイミー・バレット判事を指名した。承認されるかどうかはまだわからないが、バイデン氏サイドは新しい大統領が決まってから決めるべきとして反対している。というのも、現在の最高裁判事の構成は「保守派5対リベラル派3」。近年はロバーツ長官が「穏健化」しているといわれ、もしトランプ大統領が選挙を違法と訴えた場合、「4対4」となって結論が出ないことも考えられる。

トランプ大統領としては何としてもバレット判事を早く任命して、保守派の優位を固めたいところである。

トランプが再選されれば、あと4年激しいアメリカ第一主義が続き、トランプ氏が敗れば、しばらく(1月には新大統領の任命式が行われるが...)は新大統領が決まらない混とんとした状況が続く。それでも新型コロナは待つてはくれない。他国ながら行く末が心配されるアメリカである。

10月22日現在の支持率



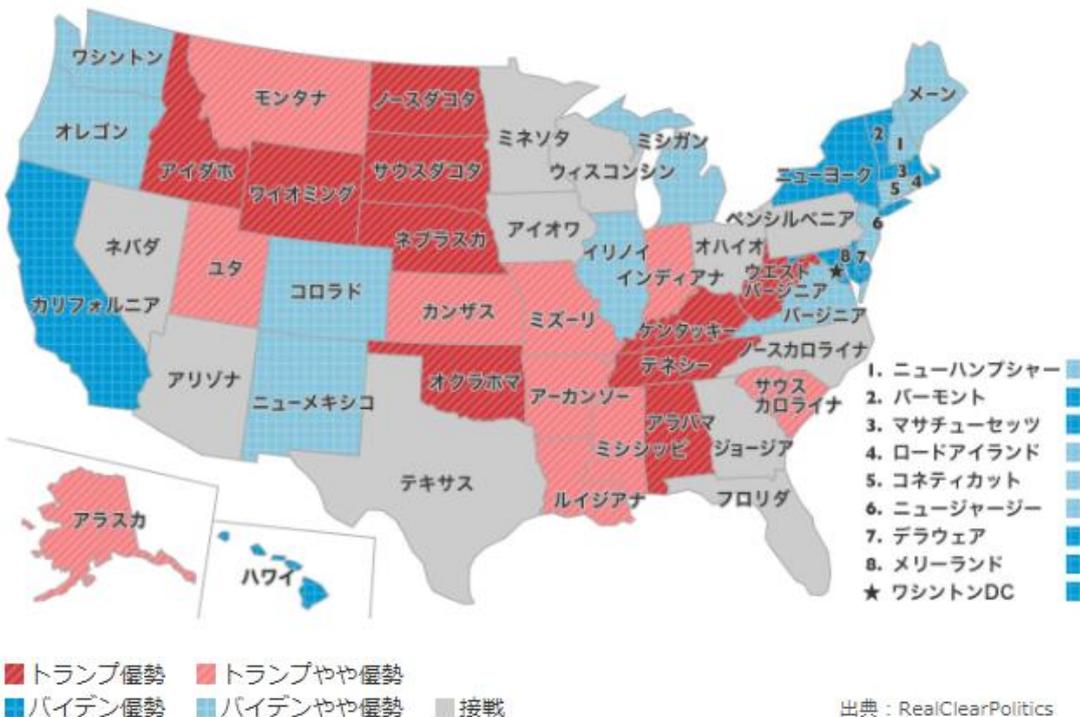
しかし、オッズ、賭けの世界では...





Market Flash

分断されるアメリカ



世論調査をもとに、各州の情勢と獲得選挙人の予想を表示。アメリカ大統領選挙では、候補者は州ごとの勝敗に応じて各州に割り当てられた「選挙人」を獲得していく。合計538人の選挙人のうち、過半数の270人を得た候補が当選となる。

Market Flash

分断されるアメリカ



バイデン氏はどんな人物？

前副大統領

1942年11月20日生まれ 東部ペンシルベニア州出身

「将来は大統領に」

東部ペンシルベニア州スクラントンで生まれたバイデン氏。

10歳のときに、父親の仕事の都合で東部デラウェア州に移り住んだ。

子どものころから、バイデン氏はきつ音に悩み、鏡を見て話し方の練習をしたことなどを明らかにしていて、集会でも、どのように克服しようとしたかについても語っている。



バイデン氏は、大学時代に知り合った女性と24歳のときに結婚。

当時、法律の勉強をしていたバイデン氏は、女性の母親から将来、就きたい職業について聞かれ「大統領」と答えたとか。

悲劇を乗り越えて議員へ

バイデン氏は弁護士を経て、地元の郡議会議員を2年務めた後、1972年、当時29歳の若さで上院議員に初当選した。しかし、当選から僅か1か月後、クリスマスツリーを買いに出かけた当時の妻と1歳の娘を交通事故で亡くした。その際、同乗していた息子2人もけがをした。

バイデン氏は、「絶望で自殺を選択する人の気持ちが分かったが、息子たちのことを考えて、生きるために戦うことにした」と、後に当時の心境について語っている。

そのため、バイデン氏は当初、息子たちのために議員になることを辞めようかとも考えたが、周りのサポートもあり議員になることを決め、就任の際には、息子2人が入院していた病室で宣誓を行っている。

オバマ前大統領を支えた長年の経験

2009年まで、36年にわたってデラウェア州の上院議員を務めたバイデン氏は、民主党中道派の重鎮として知られる。長年、司法委員会に在籍したほか、外交委員会にも所属して委員長も務め、外交・安全保障のエキスパートでもある。

2009年に副大統領に就任してからは、外交経験が浅いオバマ前大統領を支えた。

副大統領在任中、2011年と2013年に日本を訪れていて、東日本大震災の被災地、仙台を訪れて復興の現状を視察している。

再び襲った悲劇

2015年、大統領選挙に立候補するかどうか検討している中、バイデン氏の長男が脳腫瘍で46歳の若さで亡くなった。

息子はバイデン氏が大統領選挙に立候補することを望んでいたが、バイデン氏は立候補しないことを表明。

当時の心境を振り返り、「息子の期待に応えようと勇気を出したかったが、家族を失った悲しみを経験しているだけに、大統領選挙を戦う気力があるかどうか分からなかった」と語っている。



Market Flash

分断されるアメリカ

3度目の正直?! 満を持して立候補

息子の死から4年後、亡くなった息子の思いなどが決断を後押しし、2019年4月に大統領選挙に立候補した。集会でも家族を失った経験などを話し、医療保険の大切さを訴えて、同じ悲しみを抱える有権者との絆を築いてきた。

実は今回の立候補は3回目。

1987年に立候補したときは、演説の盗用を指摘され撤退。

2008年のときには、予備選挙の序盤戦で支持を伸ばせず撤退している。

今回の大統領選挙では、予備選挙が始まる前から、抜群の知名度と豊富な政治経験に加え、黒人層や労働組合からの支持も厚いことなどから、優位な選挙活動を進め支持率はトップを走っていた。

しかし、77歳という年齢がネックになったほか、ほかの候補の勢いに押され、予備選挙の序盤戦のアイオワ州での党员集会では、4位と低迷し苦戦を強いられた。

もしバイデン氏が、大統領選挙で勝利し、大統領に就任した場合、就任時の年齢は78歳。

2017年1月に、当時アメリカ史上最高齢の70歳で就任したトランプ大統領の年齢を上回ることになる。

失言、そして、セクハラ疑惑

バイデン氏は、失言が多いことでも知られていて、外国を批判する内容から、大統領選挙への立候補を表明する前から「選挙戦を戦っている」とうっかり述べたものまで、さまざま。

バイデン氏は黒人層からの支持が厚いことでも知られているが、5月に、黒人の若者たちを中心に人気があるラジオ番組のインタビューで、「私とトランプのどちらを支持するか迷うようでは黒人ではない」と発言し、人種差別的だと批判された。

2019年8月には、アジア系とヒスパニック系の有権者が主催したアイオワ州での集会で、「貧しい家の子どもたちも白人の子どもたちのように輝いているし、才能を持っている」と発言し、差別的な発言だと批判を受けた。

2019年4月には、複数の女性から過去に体を触られて不快な思いをしたなどとセクハラ被害を訴えられ、釈明に追い込まれた。

2020年4月には、事務所の元スタッフの女性から過去に性的暴行を受けたと訴えられ、「事実ではない」と全面的に否定している。

そんなバイデン氏は、トランプ大統領からは、「スリーピー・ジョー＝寝ぼけたジョー」とあだ名を付けられ、ツイッターなどで繰り返し使われている。

大好物はアイスクリーム

バイデン氏は、アイスクリームには目がないとも言われていて、民主党の候補者選びの選挙運動中にもアイスクリーム屋に立ち寄る姿が…

2017年1月に、文民としては最高位となる自由勲章を受章した。